

昭和からの伝言(6)

―昭和天皇・マッカーサー元帥会見―

土田 良吉

昭和20年(1945)9月、敗戦からおおよそ、ひと月が経って、GHQによる本格的な日本統治が始まります。実質的にはアメリカによる単独占領であって、そのためGHQのトップにいたマッカーサー元帥の命令は絶対的であり、マッカーサーはこう述べている。

「私は、日本国民に対して、事実上無制限の権力をもっていた」「歴史上いかなる殖民地総督も、征服者も私が日本国民に対して持ったほどの権力を持ったことがなかった。私の権力は至上なものであった」と、それでもマッカーサーはミズーリ号での調印式や、第一生命ビルの接収だけでは、支配者としてのイメージを日本の指導者や国民の目に焼き付けるには不十分と考えた。「早急に天皇と会見する必要があるが・・・」と。実は、マッカーサーはGHQの幕僚たちから、こう強く求められていた。『われわれの権力を示すためにも、天皇を総司令部に來させてはどうか早急に敗戦の惨めさを思い知らせる』、そう言った声までであった。然しマッカー

サーは迷っていた。(天皇を呼びつけるのではなく天皇から会いに来るのを待つことにしたら)と考えた。

マッカーサーはなぜ天皇を呼びつけなかったのか？それはマッカーサーの経歴と深く関係しているのである。マッカーサーは、1880年、アメリカ合衆国のアーカンソー州で生まれた。陸軍士官学校を主席で卒業、アメリカ軍に入り、フィリピン赴任を経て軍のトップである参謀総長に就任した。アメリカ史上最年少の50才、陸軍のエリートであった。太平洋戦争が始まるや、5回目となるフィリピンへ。こうして長年フィリピンに滞在していたマッカーサーは、アメリカ陸軍きつてのアジア通でアジア人の心理をよく理解していたと言われていた。幕僚たちが、権力を示すために天皇を引き寄せたらと強く勧めたが『そんなことをすれば、日本の国民感情を踏みにじり、天皇を国民の目に殉教者に仕立てあげることになる』と、さらに『日本は天皇崇拜のお蔭で、戦後も無政府状態にならず、肅々と敗戦を受け入れたのだ』と考えていた。『無理やり天皇を呼びつけたりすれば日本国民の反感を買い、今後の占領がやりにくくなる、私は待とう。そのうち天皇が自発的に私に会いに来るだろう。西洋のようにせつかにするよりは、東洋のように辛抱強く待つほ

うが、我々の目的に叶っている』と。これは叶っていた。マッカーサー自身が言うようにアジア人の心を理解していたから、特に、日本人をよく理解していたからそのような態度がとれたのだろう。後に副官であるバンカー大佐は『ゼネラル・マッカーサーは心理的な側面では天皇を通じて占領を極めて効果的に行なった』と、言っている。

ところが日本側も、早急に会見したいと考えていた。日本がポツダム宣言を受諾した最大の理由は、**国体が護持（＝天皇制存続）**されると思っていたことである、しかしポツダム宣言の中では戦争責任などを追及する軍事裁判も行なうことも謳われていた。天皇が糾弾される可能性もあった訳で、だから日本政府は「天皇が軍事裁判で糾弾されるか如何か」をGHQから探りたかったのではなからうか。

実際、アメリカでは「天皇を糾弾せよ」という世論が高まっていた。それで宮内庁関係者は日本統治において最高権力を有するマッカーサーの考えを探ろうと情報集めに奔走したが、何もつかめずにいた。それだけにマッカーサーとの会見も踏み切れずにいた訳です。そんななか、昭和20年（1945）9月20日、昭和天皇の侍従長・藤田尚徳（ひさのり）のもとへ一本の電

話が掛かってきます。相手は時の外務大臣吉田茂であった。「マッカーサーと会ってきたがマッカーサー元帥に「もし天皇陛下があなたを訪問したいと言われたらどうなさるか」と質問したところ「喜んで歓迎申し上げます」との返事だったとの内容であった。

実は、吉田茂大臣から電話がかかって来る前に、侍従長の藤田尚徳もマッカーサーに会っていた。その時、藤田尚徳が昭和天皇からのお言葉だとマッカーサーに伝えたのは、こんな内容であった。

「マッカーサー元帥閣下は開戦以来、方々の戦場で戦われ日本に進駐されたが、ご健康はどうであろうか、炎熱の南方諸島で健康を害われる様なことは無かつたろうか。また日本の夏は、残暑が厳しいので十分に健康にご注意ありたい」と、伝えるとすかさず、マッカーサーは「私のことを色々ご心配下さって感謝にたえない。どうか天皇によりしくお伝え願いたい」と。マッカーサーの丁寧な対応に藤田侍従長は安堵したが、これだけでは相手が会見を望んでいるのか分からないから吉田茂外務大臣からの一報はさぞ嬉しかったに違いない。こうして、いよいよGHQの態度がはっきりしたため、宮内庁で計画し、天皇がアメリカ大使館にマッカーサーを訪問することが決ったのです。



マッカーサーと昭和天皇
1945年9月27日、赤坂のアメリカ大使館にて

運命の日は、1945年9月27日、午前10時、昭和天皇は数人のお付きと共に、赤坂のアメリカ大使館に到着。迎賓室の入り口で待っていたマッカーサーとついに対面します。握手と簡単な挨拶を交わしたあと、天皇は中へ入ります。このとき、お付きとして許され

たのは通訳ただ一人。マッカーサーは天皇に、「こちらへお立ち下さい」、そう言って天皇の右側に立つと突如、マッカーサー付きのカメラマンがフラッシュをたいたのです。撮影に関して事前に何も知らされていないかった天皇は、驚きをかくせず、姿勢をただすことが出来ませんでした。3枚目でようやく体勢を整えることができたのです。

当初この写真は、宮内省発表の記事とともに、翌日の28日、新聞に報じられる予定でしたが、国内行政を担っていた内務大臣である山崎巖が、これを不敬だとして掲載禁止にします。これまで国民が見慣れた天皇の写真は、ご真影と呼ばれた陸海軍元帥の礼服装か、白馬にまたがった陸軍観兵式などでの勇姿でした。それが、この写真では平民と変らないモーニングにネクタイと言う姿だったからです。さらに現人神である天皇が直立不動の姿勢をとっているのに対して、並んだマッカーサーはノーネクタイに開襟シャツという軽装、こうした理由から、不敬だと掲載を差し止めたのです。しかし、新聞に写真が載っていないことを知ったGHQは激怒、依然として旧体制の考えを持った者が未だ居るとして、言論に対する一切の制限令を撤回し、新しい言論の自由に関する新措置を指令し、日本

政府による検閲を停止させたのです。こうして会見から2日後の29日、二人の写真が掲載されます。これを見た国民の多くは、日本が戦争に負けたことを改めて実感させられたといえます。

この写真を撮ったのち会見が始まります。会見の主な内容は、天皇が開戦を遺憾としていることやポツダム宣言の履行に就いての確認です。天皇をマッカーサー元帥は、エンペラーと呼び「天皇にすべてを訳し伝えよ」と、強い口調で通訳に伝えると、演説めいた口調で十分間にもわたり話しつづけた。マッカーサーが滔々と所信表明とでも言うべき演説をしていたのには、次のようなわけがあったからかも知れません。のちにマッカーサーは此の時のことを振り返りこう言っているのです。「私は、天皇が戦争犯罪者として起訴されないよう自分の立場を訴えはじめるのではないかと言う不安を感じ、天皇は命乞いをしに来たのでは」と、考えていたという。実際、天皇を戦犯として起訴すると、声高々に叫ぶ者も居ましたから。然し、そんなマッカーサーの先入観を天皇は覆し、その心を動かすのでした。耳を疑うようなお言葉でした。「私がアメリカ製の煙草を差し出すと、天皇は礼を言って受け取られた。その煙草に火をつけて差し上げると天皇の手は震えて

いた」。マッカーサーの勧めで普段は吸わない煙草を手にした天皇は、隠せないほどの緊張を和いだのです。

マッカーサーが思い出話をしたのがキツカケでした。「私は、日本とは40年来の縁があるのです。最初の日本訪問は日露戦争の時、父が従軍武官として来た際の副官として来たのです。戦争後には一度、天皇の父君に拝謁したこともあるのですよ」と、そんな話をする内に天皇の警戒心は薄らいで気持ちも和らいでゆきます。すると天皇は「私は国民が戦争遂行に当たって政治、軍事両面で行なったすべての決定と行動に対する全責任を負うものとして、私自身をあなたの代表する諸国の採決に委ねるためお訪ねしました」と。何と戦争責任の全てを負うというのです。マッカーサーは『死を負うほどの責任、明らかに天皇に帰すべきではない責任をも引き受けようとするこの勇氣に満ちた態度には、私の骨の髄までも揺り動かされた』私はその瞬間私の前にいる天皇が個人の資格においても日本の最上の紳士であることを感じとった」と述べている。気づけば、会見の時間は予定より大幅にオーバーしていた。35分にも及ぶ会見で、昭和天皇とマッカーサーは心を通わせたのであった。会見が終わると、マッカーサーは天皇を大使館の玄関まで見送ります。予定外

のことで最高の敬意でした。

天皇がマッカーサーに直接『先の戦争の責任は私にあります』と、非常に率直な形で述べられたわけです。

その素直さにたいして、マッカーサーは非常に感激し、『天皇との信頼関係が築けた』、また『日本国民の信頼も勝ち得たと判断した』のではないだろうか。この会見の成功が、敗戦国**日本の歴史を大きく変えること**になったのです。

東京裁判が開廷されるや！天皇を守るマッカーサーの裏工作とは？昭和天皇とマッカーサー第1回の会見後、7ヶ月ほど経った昭和21年（1946）5月3日、東京市ヶ谷の旧陸軍士官学校大講堂を法廷にして東京極東国際軍事裁判が開かれる事になります。ポツダム宣言に基づき日本の戦争責任を追及するという。注目されたのは最大の戦争責任者とされた昭和天皇の処遇でした。当時、連合国側では天皇を戦争責任者として裁判にかけ、処刑追放すべきとの声が高まっていた。

実はマッカーサーは終戦後、天皇が国際法違反に関与していないか、戦争責任はあるか、すべての証拠を収集せよと、アメリカ本国から命じられていた。これに対し、マッカーサーは昭和21年（1946）1月25日アイゼンハワー陸軍参謀総長に、こう回答している。

『天皇の犯罪行為について調査したが、過去10年の間天皇が日本の政治決定に関与した明白な証拠は見つからなかった。天皇告発は日本人に大きな衝撃を与え、天皇制の破壊は日本を崩壊させる』と。またマッカーサーはこう考えていました、『日本は降伏しても、天皇制は存続すると信じたから、ポツダム宣言を受諾した。そのため、もしこれを裏切り天皇を裁けばゲリラ戦が各地に起こり、これを制圧するには多くの人材と莫大な費用を要することになる。占領を容易に遂行するためにも天皇を裁判にかけるべきではない』と。そこでマッカーサーは色々な手を打ちます。

如何のようにして**天皇の裁判を阻止**したのか？

第一回会見から凡そ3ヶ月後の昭和21年（1946）1月1日、昭和天皇の発意として「新日本建設に関する詔書」が出されます。天皇みずから現人神であることを否定した所謂、人間宣言を行なった。この原案はGHQによって作られました。マッカーサーはこの人間宣言によって新たな天皇像を作り上げ天皇の独裁者のイメージを払拭しようとしています。そして天皇制を存続させ、天皇が裁判で糾弾されないよう、東京裁判のために来日したアメリカのキーンナン主席検事に其の意向を伝えます。これによりアメリカ政府も『天皇に

責任を問わない』事になりました。しかし連合国のうちソ連とオーストラリアなどは未だ、天皇の戦争責任を追及する強い構えだった。天皇を裁かないことを前提に裁判を進めるよう他国を説得し同意させたのですが、裁判が始まると、天皇を裁かないことに矛盾が生じました。

それは、あの人物の発言がきっかけであった？

天皇が裁判の危機？ **東京裁判の行方は？**

東京裁判を行う上で大きな課題となったのは、天皇の戦争責任を追及することであった。この時これを制したのは、天皇との会見を済ませたGHQ最高司令官のダグラス・マッカーサーでした。マッカーサーの働きかけによつて、天皇を糾弾しない方向で裁判は始まります。ところが昭和22年(1947)12月31日の法廷で、開戦当時の総理であった東条英機(第四十代総理大臣)への検察尋問で状況が一変します。

「天皇が望んでいないのにあなたは戦争することを選択した、其れについてあなたはどう思っているのか」、こう問われた東条は「私は忠実な軍人で陛下に背いたことはない」これは即ち天皇の命令で戦争を行なったということ。これでは天皇の戦争責任を追及せねばならなくなってしまう、そこでアメリカのキーンナン主席

検事は検察尋問を打ちきり法廷が正月休みの間に、東条と親しい軍人や官僚を使い東条を説得させたのです。東条は渋りながらも天皇を訴追させないためにこう発言します。「陛下には責任なし、全責任は自分にある」と証言。何とか天皇を出廷させずに済んだのでした。

マッカーサーは占領下において、日本の民主化にも力を注ぎます。それは日本を二度と戦争国家にしないため、民主化という名のもとに日本の軍国主義を徹底的に壊滅する事が大命題だった。武装解除を行い背後にある財閥やそれを運用する人間の追放を徹底的に行なった。憲法改正もその一つでした。マッカーサーは占領当初から時代遅れの明治憲法(明治22年・1889年)に公布された大日本帝国憲法を改正すべきだと口にしてきた。民主的な憲法を作るべきだと。これを受けて日本政府は新たな憲法の草案を作りますが、明治憲法と変わらないということで却下されます。そこでGHQ主導で新憲法の制定に取り掛かることになり、別名マッカーサー憲法といわれた日本国憲法の草案が出来ます。

その最初に掲げられたのは、天皇の地位についてでした。天皇は国家元首の地位にある。皇位は世襲される。天皇の職務および機能は憲法に基づいて行使され

る。憲法草案の作成に携わったGHQのホイットニー局長は「草案が守られれば天皇は安泰になるだろうと語った。マッカーサー・ノートに基づく三原則。第1は、天皇の地位は国民主権に基づくものとする。第2は戦争の放棄、第3は封建制度の廃止、といった大原則が掲げられたこの草案に、当時の幣原内閣(第44代内閣総理大臣幣原喜重郎)は驚きます。「自分たちには考えも及ばないような形で日本や日本国民の権利などが書かれていた。新しい日本の憲法草案は、当時世界のなかでも斬新的な民主憲法だった。新憲法についても昭和天皇とマッカーサーは話し合ったという。

昭和21年(1946)10月16日、第3回目の2時間にわたった会見で天皇は「日本国民は戦争放棄の実現をめざしてその理想に忠実でありたいと思う」と述べ、これに対しマッカーサーは『戦争放棄を決意する日本国憲法は歴史の意味を持つだけでなく、戦争を放棄したがゆえに道徳的な評価を受ける。その面で日本は、国際社会のリーダーになりうる』と語った。

日本国憲法は、其の年の11月3日に公布され翌年の5月3日施行された。こうして天皇は日本国民の象徴となったわけです。

マッカーサーとの会見は回を重ねるごとに親密をふ

かめていきます。第4回目の会見から以降マッカーサー元帥は天皇を【陛下】と敬称で呼ぶようになりました。関係は親愛そのものになり、マッカーサーは天皇を当惑させたり、屈辱感を与えたりはしないよう常に気遣ったという。ところがマッカーサー司令官が突如、解任? 最後まで日本人に慕われた理由とは?

昭和26年(1951)4月11日マッカーサーは突如司令官を解任されます。朝鮮戦争の進め方について当時のアメリカ大統領・トルーマンと意見が対立したことが理由とされています。この突然の報せに、日本中は驚かされます。昭和26年(1951)4月15日、昭和天皇はマッカーサーに別れの挨拶に行きます。第11回目で、これが最後の会見になりました。

そしてその翌日4月16日マッカーサーは慌しく日本を去って行きます。羽田飛行場へと向かう沿道には新聞発表では20数万人もの人々が、星条旗と日の丸を振ってマッカーサー一行を見送ったといわれています。

それにしても、日本占領の司令官がこんなにも人気があったのでしょうか。今85才の老人は当時は小学生その回顧談があります。「アメリカの援助物資なども色々な形で、学校を通じて食べさせて貰いました。当時は脱脂粉乳など配られました。多分いまの人は殆ど飲

めないでしようが。学校でお昼の時に最初に飲んだ時の、あの美味さっていうのはね！！今でも頭から離れないです」と。

マッカーサーの政策が自分たちのためになっている有り難さを日本国民は身を以って知らされていた。ですから、むしろマッカーサー、要するに占領軍、本来であれば、敵であるはずの総司令官に対して反感どころか、親身になってむしろ敬うような態度をとったのも、ある意味では非常に自然の成り行きだったと思うのです。こうしてマッカーサーは、日本統治に大成功をおさめ帰ったのです。

マッカーサーは後に、こう回想しています。

「私は何時も占領政策の背後にある色々な理由を注意深く説明したが、天皇は私が話し合った殆どの日本人よりも民主的な考え方をしつかり身につけていた。天皇は日本の精神的復活に大きい役割を演じ占領の成功は、天皇の誠実な協力と影響力に負うところが極めて大きかった」と、述べている。そして天皇は「東洋の思想にも通じている、あのような人が日本に来たことは、日本の国のためにも良かった。一度約束したことは必ず守る信義の厚い人だ。元帥との会見は今なお深い出深い」と述べられた。昭和天皇とダグラス・マッ

カーサー、此の二人の会見がなければ、日本は今とはまた違った形になっていたのかも知れません。

以上は、令和元年9月、BSテレビ放送(TBS)の『つぼん歴史大鑑定「日本の運命を決めた昭和天皇とマッカーサー会見」』を採録したものです。

以上

追記 1 — 降伏調印式 —

一、昭和20年(1945)8月15日、昭和天皇の玉音放送によって、日本の敗戦が国民に知らされた。

このポツダム宣言受諾から2週間後、日本の運命を握る人物が、厚木飛行場に降り立った。勲章はつけずネクタイも無い軽装の連合国最高司令官ダグラス・マッカーサーである。

マッカーサー到着2日後の9月2日、東京湾上に浮ぶ戦艦ミズーリの艦上で日本軍の降伏調印式が行なわれた。午前9時4分、天皇および日本政府を代表して重光葵外務大臣が調印、続いてマッカーサーと連合国の代表8人が調印。連合国に降伏するところが正式に承認されたのです。

二、調印式の翌日の9月3日、外務大臣の重光がマッカーサーを訪ねた。GHQが直接日本を統治するの

は、国民は混乱するだけだから、政策の実行は日本政府を通じて行なうよう申し入れた。マッカーサーの答えは「自分は、日本国を破壊し、国民を奴隷にする考えは全くない、要するに日本政府と国民の出方一つで、この問題は如何ともなるものなり」と、マッカーサーは日本政府を介した間接統治を行なうと約束した。これを伝えた時の昭和天皇のご様子を書いた重光の手記が残されている。「陛下より、それは誠に良かったね」と一方ならず、お言葉ありと。

三、コーンパイプと服装規則違反といわれるフィリピン軍帽がトレードマークであったマッカーサーは朝鮮戦争でついに司令官を解任されます。1951年4月16日、帰国するや4月19日、直ちにワシントンの上下院の合同会議中において退役を発表します。「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」を遺します。マッカーサーが帰国する頃にはGHQの検閲も有名無実化しており、その人格化を批判する記事が始めます。5月3日からのアメリカ上院の外交委員会と、軍事委員会の合同聴聞会の中で「日本人は12歳」などを証言。日本国民のマッカーサー熱も冷めていくのです。

1964年4月5日、老衰により85才の生涯を閉じました。葬儀は国葬として執り行われ、日本からは代表として吉田茂が参列しました。

追記 2 —ダグラス・マッカーサーのこと—

彼が指揮するGHQは、第二次世界大戦後の日本に対する占領統治の主体でした。当時の占領政策を考える上でも、その最高司令官であったマッカーサーの人間性については、よく知っておいた方がよいでしょう。

ダグラス・マッカーサーは、1880(明治13)年に南北戦争で功を挙げたアーサー・マッカーサーの三男として、アーカンソー州リトルロックにて誕生します。このころはアメリカ西部でインディアンとの植民地戦争が続いており、父に連れられたマッカーサーも幼少期の大半を戦地にて過ごすことになる。その後、父の転属のためフォート・セルデンの砦に移るなど、幼少期はほとんど軍の砦の中で生活していたとされている。

1899年の米比戦争で、父は義勇軍師団長として、スペイン領のフィリピンを侵略し、初代フィリピン大統領を生け捕りにするなどフィリピン植民地の総督となる。

ダグラス・マッカーサーは、1903(明治35)年、陸軍士官学校を首席で卒業し、陸軍少尉として任官した。第3工兵大隊所属となり、マッカーサー家が利権を持つているフィリピンに配属される。

1922年、フィリピン・マニラ軍管区司令官として着任。フィリピン社会の上層部に幅広く強い人脈を作る。1925年に、アメリカ陸軍史上最年少の44歳で少将へ昇進する。

1935年、参謀総長を退任し再び少将となったマッカーサーは、破格の条件で大統領予定者マヌエル・ケソンの要請を受け、フィリピンに軍事顧問として赴任する。

1936年、フィリピン陸軍の元帥に任命されたが、軍事力の整備は、資金難により一向に進まず困惑していたが、マッカーサー個人はアメリカ資本のフィリピン企業に投資を行い、多額の利益を得ていた。1937年、陸軍を退官して生活拠点を完全にフィリピンに移し、ジーン・マリー・フェアクロスと結婚した。

第二次世界大戦

1939年9月、第二次世界大戦が勃発。1940

年、日本軍が仏印に進駐したため、ルーズベルト大統領は日本の在米資産を凍結、石油禁輸を宣言し、日米関係は緊張した。戦争になった場合、フィリピンの現戦力では心許ないため、戦力増強が図られた。1941年、ルーズベルト大統領は、東南アジア事情に詳しいマッカーサーの現役復帰を要請。7月26日付で少将として召集、翌日付で中将に昇進し、在フィリピンアメリカ軍とフィリピン軍を統合したアメリカ極東陸軍司令官となった。

1941年12月8日、太平洋戦争が勃発。マッカーサーは真珠湾で日本軍が撃退されるものと考えてその報告を待ち、B-17による台湾攻撃を2度も却下し、時間を無駄にした。翌朝、3回目ようやく許可したが、飛行場に並んでいた新鋭機は、上空に現れた日本軍機の攻撃によりほとんどが地上で破壊された。マッカーサーは、日本人をフィリピンの未開人程度に考えていたため、飛行機を操縦できると思っておらず「操縦者は日本の同盟国であるドイツ人パイロットに違いない」と考え、間違った認識のまま本国に報告を行っていたという。

12月10日、頼みの航空戦力が序盤で壊滅し、日本軍がルソン島上陸を開始した。12月22日にはリン

ガエン湾から上陸してきた日本軍2個師団をルソン島防衛軍9個師団が迎え撃ったが、訓練不足で勝負にならず逃げ出した。

アメリカ極東陸軍はマニラ市を放棄し1942年1月6日までにバターン半島とコレヒドール島に籠城する。想定外の10万人以上が立て籠ることになり、日本軍は攻略に手こずるが、アメリカ極東陸軍も飢餓に苦しんだ。アメリカ軍首脳はフィリピン救出は不可能と判断する。

マッカーサーは安全なコレヒドール要塞に籠って前線に出てこないため兵士たちから「Dugout Doug」と揶揄されていたが、アメリカ本国のメディアにより「2ヶ月にわたって日本陸軍を相手に『善戦』している」と、「英雄」に仕立てられた。万一マッカーサーが捕虜になってアメリカ軍の士気が低下する事を恐れたルーズベルト大統領は、マッカーサーにオーストラリアへ脱出するよう命じた。3月11日、マッカーサーはアメリカ海軍の魚雷艇でミンダナオ島に脱出した。一行はデルモンテ飛行場から、B-17に乗り込み、オーストラリアに着いた。3月20日、アデレード駅に到着するとマッカーサーは、集まった報道陣に向かって「shall I return」と宣言したが、この敵前逃亡でマッカ

ーサーの軍歴と自尊心に大きな傷がつき、「I shall I return」は当時アメリカ兵の間では「敵前逃亡」の意味で使われていた。

オーストラリアへ脱出後も、マッカーサーはフィリピン防衛の指揮権を手放さず、現場の状況も分からないまま命令を送り続けていた。マッカーサーは、アメリカ史上もつとも悲惨な敗北を喫した将にも拘わらず、英雄としてアメリカ人に熱狂的に支持され、ルーズベルト大統領は彼に宣伝価値を見出し、議会名譽勲章を授与した。

4月18日、マッカーサーは南西太平洋方面の連合国軍総司令官に就任したが、殆ど戦力が無いことに青ざめた。戦争の先行きを悲観したオーストラリアは国土の大部分を放棄し、南東部の人口密集地だけ守ろうという考えに傾いていたため、これを説得して止めさせ、ニューギニア島を盾にオーストラリア大陸を防衛させるようにした。

6月5日、ミッドウェー海戦で日本海軍が主力4空母を失って敗れ、アメリカ軍が反攻に転ずる。マッカーサーは、日本軍の守備が固い所は攻撃を避け補給路を断って無力化するのを待ち脆弱な所を攻撃するといふ「蛙飛び作戦」を考案した。ニューギニアの戦いで

は日本軍はマッカーサーの思惑に嵌り、多くの餓死者・病死者を出すことになった。之でフィリピンで損なったマッカーサーへの評価を回復した。

フィリピンは台湾の代わりに戦場となり、マッカーサーは、174,000名の兵員を用意する。10月20日、殆ど抵抗を受けずレイテ島を攻略し、フィリピン全土解放の足掛かりとした。日本の軍政の失敗で貧困や飢餓に苦しめられていたフィリピン国民の多くは、熱狂的にマッカーサーを歓迎した。マッカーサーは回顧録で「日本軍の人的損失と比較すると我が方の損害は少なかつた」と述べているが、民間人を含むフィリピン人の死者は50万人にのぼった。12月、マッカーサーは陸軍元帥に昇進した。

1945年4月12日、ルーズベルト大統領が死去。副大統領ハリール・S・トルーマンが大統領に昇格した。これにより陸海軍の日本本土進攻の主導権争いが激化し、マッカーサーは南部九州攻略作戦である「オリンピック作戦」を担うこととなったが、原爆投下とソ連の対日参戦で、日本は8月15日にポツダム宣言を受諾したため、「オリンピック作戦」は開始されることはなく終わった。

トルーマン大統領はマッカーサーを嫌っていたが、

本国での圧倒的な人気を考慮し、**連合国軍最高司令官**として**日本占領を任せる事**とした。トルーマン大統領からは、「天皇と日本政府の統治権はマッカーサーに隷属しており、その権力を思う通りに行使できる」「我々と日本の関係は条件付きのものではなく、無条件降伏に基づいている」「マッカーサーの権力は最高であり日本側に何の疑念も抱かせてはならぬ」亦「日本の支配は満足すべき結果が得られれば、日本政府を通じて行われるべきであるが、必要であれば直接行動してもよい」又「出した命令は武力行使も含め必要と思う方法で実施せよ」という**空前の権力が与えられていた**。

マッカーサーが厚木基地に降り立つ姿がありますね。あの時のマッカーサーの心情は、日本の天皇の戦争責任を問い、**戦犯にかける**、というものだったそうです。それが一変して「親日家」とまでいわれるほどに……？
連合国軍総司令部（GHQ）のトップとして戦後の日本で「王」のように振る舞ったダグラス・マッカーサー。昭和天皇を日本国民団結の象徴であると考え「天皇制を廃止し天皇を退位させても占領政策への効果は疑わしい」とし、天皇制維持の方向で国務省に意見を提出している。このため昭和天皇の戦争責任は不問と

する方針となった。

最初にマッカーサーが着手したのは日本軍の武装解除だった。内外に700万人の兵力が残存していたが、陸海軍省など既存組織を利用することにより平穩無事に進み、内地の257万名の武装解除は2カ月で完了した。

続いて戦争犯罪人の逮捕が行われた。マッカーサーは共産主義勢力の拡大を恐れていたため極東軍事裁判での訴追回避に尽力するなど戦犯に同情的だったが、フィリピン戦に関する訴追には「聖なる義務」と称して、山下奉文大将と本間雅晴中将については、戦争終結前から訴追の準備をしており、なるべく屈辱的な手段で殺すことを決めていた。明らかな復讐裁判で、絞首刑であった。

大統領選出馬

マッカーサーはアメリカ大統領選に興味を持ち、1948年に予定されていた大統領選を見越して準備を進めていた。現役軍人は大統領になれないため、本国に日本統治の安定ぶりをアピールし、日本の統治そのものを早く終わらせようとしていた。1948年、マッカーサーは共和党から大統領選に出馬することを表

明した。この際、日本中の新聞や商店にはマッカーサーの大統領選を応援する広告が掲載され、本国のニューヨーク・タイムズでも有力候補として紹介されるなど、その抜群の知名度により一気に有力候補となった。だが、選挙になると党代表候補選でトマス・E・デューイに大敗を喫し、大統領への道は絶たれた。

さて、朝鮮戦争とは？

朝鮮戦争の開戦の直前まで、日本に逃亡する計画すら立てていた韓国の李承晩大統領であったが一転して「北進統一」を掲げ強気の攻勢を主張しはじめました。マッカーサーも北朝鮮を潰しての半島統一を考えており、両者の思惑は一致していた。しかし「中国の介入はない」という思い込みがある中、半島統一に向けた軍事行動に際し、マッカーサーはトルーマン大統領から或る条件をつけられていたのです。「ソ連や中国が半島に介入するようなことがあれば、北進はダメだ」というのがそれです。ソ連や中国を相手にアジアで大戦争をする気は、トルーマンにはありませんでした。この点についてマッカーサーは「ソ連は言うまでもなく中国の介入の可能性はない」と、トルーマンに答えていました。

ところが朝鮮半島において1948年に成立したばかりの朝鮮民族の分断国家である大韓民国（南朝鮮、韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との間で朝鮮半島の主権を巡る国際紛争が勃発します。通説では1950年6月25日に、金日成率いる北朝鮮が事実上の国境線と化していた38度線を越えて、韓国に侵略を仕掛けたことによるものとされています。

マッカーサーはCIAなどから朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の不穏な動きを報告されていたにも関わらず「朝鮮半島で戦争は起きない」と決めつけて策を講じておらず、北朝鮮の南部侵攻の報を受けて大きなショックを受けます。本国から朝鮮半島に展開するアメリカ軍の指揮権を付与されたにも関わらず「北朝鮮の侵攻は一時的な勢いであり、すぐに大韓民国（韓国）側が盛り返して沈静化する」と判断して、又しても、ろくに手を打たず北朝鮮が38度線を越えて侵攻を開始してから1週間後の7月2日、ようやくアメリカ軍は半島に本格介入し始めます。本格介入したとはいえ、アメリカ軍は朝鮮半島南端の釜山近郊まで北朝鮮軍に追い詰められました。そこで何とか踏み止まり、反転攻勢を仕掛けていきます。その結果、権限付与の翌日には韓国の首都・ソウルが北朝鮮に占領されてし

まうのです。首都陥落の知らせを聞いたマッカーサーはようやく事の重大さを認識し、直ちに韓国に赴いて韓国大統領李承晩と会見し、前線の兵士達の激励を行つた。

窮地に陥つた韓国側を救うべく占領された仁川への上陸作戦を計画したが、この作戦はマッカーサーをして「成功率は0.02%」と言わしめるものであった。周囲は作戦に反対し、本国の陸海軍幹部やハワイの太平洋艦隊司令官が東京に直談判に現れる程であった。他に打開策が無かったため作戦を強行し、見事に成功させた。この成功により韓国側はソウル奪還を達成し以後、米軍側にはイギリス軍なども参画して国連軍が編成され、9月28日、マッカーサーは高い人気と名声を得た。

ソウル奪還後、トルーマン大統領は「無駄な北上は中華人民共和国（中国）を刺激する」として、北上しないよう命令を出していた。しかしマッカーサーは「中国は戦争に絡んでこない」と考えて勝手に北上を続け、中国との国境線近くまで攻め進んだ。その結果、中国の義勇軍（実際は人民解放軍）が、朝鮮側に参戦する事態となり朝鮮戦争の泥沼化を招いてしまった。これは戦場でインフラも無く荒野と化した朝鮮半島に滞在

する事を嫌ったマッカーサーが、事あるごとに住み慣れた東京に帰っていた為、現地の戦況を正確に把握していなかった事が原因とされている。

再び窮地に陥ったマッカーサーは台湾へ逃れた中華民国政府と連携した、中国本土への直接攻撃を主張するようにになり、ついには満洲への核兵器の使用、朝鮮半島への放射性物質の散布すら、唱えるようになった。トルーマン大統領は中国への核攻撃によるソ連参戦とそれに伴う第三次世界大戦を危惧して之を採用せず、マシュー・バンカー・リッジウェイ中将が、国連軍を立ち直らせ、1951年3月に現有兵力により中国軍を38度線まで押し返した。失地を回復したものの、総合的な損害は大きく、朝鮮の国土は荒廃しつくされ、犠牲者は500万人を超えたといわれている。

面目を失ったマッカーサーは、文民統制を無視し、3月3〜4日に開いた会見で、勝手に中国に最後通牒を叩きつけていたという。

1951年4月11日の深夜、トルーマン大統領は、急遽、記者会見を開きマッカーサーの解任を発表した。こうしてマッカーサー(71才)は総司令官を解任される。この時マッカーサーは、マリー夫人に「漸く祖国に帰れる」と、淡々としていたという。

1953年5月27日、朝鮮戦争は休戦となった。

本国では原爆使用の問題以前に、マッカーサーは総司令官としての適性に欠ける人物であり、解任されるべくして解任された「能なし司令官」と酷評されます。

本国に戻ったマッカーサーであるが、上院外交委員会と軍事委員会の合同聴聞会で、「朝鮮戦争についての発言に矛盾があると見られる」などがあり、しだいに国民の人気も影を潜めるのでした。

1952年(72歳)のアメリカ大統領選では、再び出馬を模索したが高齢のため支持を得られず断念する。

とはいえ功績を忘れていない人が多く、1960年(80歳)、日本は統治時代の功績を讃え「勲一等旭日桐花大綬賞」を贈りました。また翌年、フィリピン政府の独立15年式典に招待されます。つづいて1962年には、母校のウェストポイント陸軍士官学校から、最高の賞であるシルバヌスセイヤー賞が贈られます。

84才を迎え老衰で病床に伏した際も、気丈に振舞って医師や看護婦。家族を元気づけていたという逸話が残っております。

命尽きるまで弱音を見せなかったのです!!

2020年12月回想記